

あの忌まわしい東日本大震災を忘れることはできない。その時、私は米沢の病院にいた。帰心矢の如し。私は福島島の病院に戻った。通れる道を探せば、須賀川の実家に帰れることを知り、車を飛ばした。すると、倒壊した建物が多く、まるで巨大な怪物が暴れた後のような光景であった。実家に着いて、両親が無事であることに落涙。しかし、屋根の瓦は落ちて、空が見えて、実家の傷み具合を目の当たりにして、まるで自分が壊されたような気持ちがあった。

あの時、家の修復に尽くしてくれた父は、もういない。足腰が弱くなって、実家で父と晩酌した時にも転倒した。その後、知人から聞いた。「息子に来て飲みすぎた。気分が良くて、よろめいた。しかし、傍らに名医がいたから病院に行かずに済んだんだよ」と言っていたらしい。私は落涙した。その後、父は転倒して骨折し、それを契機に体

民報 サロン

力の消耗に至ってしまい。これまで、医師として、多くの方の臨終に立ち会ってきたが、肉親を亡くすということが、こんなにも悲しいことかと痛切に実感した。

晩節に、父の病室から、高い木のてっぺんに凜とした一個の柿が見えた。木守柿。天への感謝であり、次の実り

骨を折る、骨に刻む



柿沼 雄二

の世で大恩ある父に再会する時に「お父さん、やれるだけのことはやってきたよ」と言えるように。母もまた、施設での転倒をきっかけに自分では歩くことができなくなってしまふ。私が総合南東北病院に着任した日であった。その日のうちに手術してもらい、病院の組織力を実感した。

(しまった)で、勤勉勤労しながら涙していた母であるが、寝たきりの時間が長くなってしまつて認知症が進み、感情の発露が乏しくなつて、今ではもう、母の涙を見ることはない。

われわれの仕事も骨の折れる仕事であるかもしれない。体を使った言葉を調べると、粉骨碎身、身を削る、身を粉にする、手を尽くす…。改めて労苦を惜しまず努力しなければならぬ。母の寝顔に誓う。誓いを骨に刻む。

へとつながる望みとも言われている。己という幹を世の寒風から守る木守柿だ。われこそは柿の木なりと。たくさんの実を与えたねぎらいを示し、次の実に向けて、感謝を大事に、意気に感じて、今に尽くし、明日に進むことを教えた、まさに父の姿そのものであった。私も父の姿をまねる。やがて、あ

私は何度も病棟に行き、スタッフと意思疎通を図れた。まるで、母は、私がここで浸透していけるように、自ら骨を折ったということになるまいか。しかし、やはり、高齢者の骨折は、健康寿命を縮め、全身管理を要する事態となることを、医師として家人として改めて悟った。以前は、自分への叱咤

人類の歴史は、骨を惜しまず、その時その時を、情熱を持って生きた人たちの、個人史の集積であろう。熱意豊かな理事長と院長の指揮のもとに、当院は数年後に新天地に移転して新病院となる。より高き棟を造って、より広い視野で、また新たな地平線を見ることのできよう。ここで見つかる、ここで見つける、ここで治す。その希望が、明るい未来の設計図になると信じる。

(郡山市、総合南東北病院医師)